

## コミッショナー研修所関東第21期 事前課題

平成21年11月21日(土)-11月23日(2泊3日) 群馬県青少年会館

神奈川県連盟横浜南央地区 横浜96団 中川 和之

1. あなたはコミッショナーとして、どのような活動をしていますか(コミッショナーでない人は、コミッショナーとして必要と思われる活動をお書き下さい)。

年6回、開催している地区ラウンドテーブルで、地区内のカブ隊指導者の活動に助言、指導するなどのサポートをしている。ハンドアウトなど、ラウンドテーブルに参加した指導者に、できるだけ「おみやげ」を用意することを心掛けている。

地区の各種活動に対し、主にカブ部門の各隊指導者の意見を反映させるとともに、活動の目的がスカウティングに相応しい内容になるよう、助言を行うことを心掛けている。

2. あなたの所属する地域内の現状で、気付いたことを箇条書きにして下さい

(1) 指導者のトレーニングについて

- ・研修所以外の定形外訓練の場があまり開かれていない。
- ・ラウンドテーブルが、指導者のトレーニングの場にあまりなっていない。
- ・地区の活動が、原隊に即、役立つようにすることがより必要である。

(2) スカウトのプログラム活動について

- ・少人数団に対して合同活動は行われているが、行事の実施だけでなく、進歩制度や班制度を通じた実践につなげる工夫が必要である。
- ・他隊のプログラムのアイデアを共有する機会が少ない。
- ・登録人数はある程度いる団でも、活動への出席率が高いとは言えない状況にある

(3) 団の運営に関する問題点・課題

- ・スカウト人数が少ない団に対する支援はある程度は行われているが、BVSとCSの合同や、CSとBSとの合同活動などが行われるため、隊の部門ごとに見合った活動ができない。

(4) その他館全管理、他団体との関連等

- ・学校、教育委員会との連携が困難。スカウトの時間を、部活動と奪い合うようなことになってしまう。スカウト活動のスケジュール明確化が必要だが、部活側の日程調整が遅くなるケースがあり、調整が難しくなることがある。

3. コミッショナー研修所で学びたいことをお書き下さい

リーダーとして、スカウト活動に四半世紀振りに復帰した後も、自隊の活動が中心だったため、地区やコミッショナーの働きについて、当事者意識をあまり持たないまままで過ごしていた。

スカウト上がりでありつつ、保護者リーダーでもあるという指導者の2タイプの両面を併せ持つものとして、いずれにもありがちな問題点を両方持っているとも言えるし、両方の良いところも併せ持っているようにも考えている。指導者への助言や指導を行う場面で、この両方を知っていることが有利だと実感することは少なくない。

経験の少ないリーダーを支援する際に感じることだが、保護者リーダーの場合は、スカウト技能だけでなく、班制度や進歩制度が身につけていないため、カブ部門の活動が「子ども会」的になってしまう傾向があり、スカウトたちに何のためにスカウティングをやっているのか実感させられなくなってしまふ。少人数団の場合、BVS との合同活動になると、その傾向がより顕著になる。

一方で、スカウト上がりのリーダーの場合、スカウティングの経験の蓄積は、ボーイ部門が中心となるため、カブスカウトに対する指導の仕方がつかめないという難点がある。

指導者間の意識差をどう埋めていくか。この点について、もっと深く学びたい。

カブ部門は、保護者リーダーが新しく参画してくる登竜門として重要であり、隊指導者だけでなく、各隊でデンリーダーをどう支援するかもテーマであるように思う。スカウト活動に子どもを参加させる保護者は、少なからずスカウト活動に関心を持っており、適切なもって行き方により、この活動に主体的な参画を図ってもらうことは可能であるが、隊指導者がそのような成人対策に余力を向けることは難しいのも実態である。

ボーイスカウト講習会となったことで、保護者の参加はしやすくなっているもの、隊活動以上の時間を割いてもらうために、講習会に参加しやすくするための支援策の提案も必要だと思う。この点についての支援策も学びたい。

部活や受験、進学、就職などで、活動から離れてしまうスカウトが出てくるのは、当然のことだと考える。ちかいを立てた以上、彼らは「永遠にスカウト」である。スカウト活動の現役ではないこれらのOB/OGたちを、どうスカウト活動とつないでいくか、成人指導者としての復活までいかなくても、それぞれの社会人としての得意技を活かしてのインストラクター的な関わり、1社会人としての後輩スカウトたちへの声かけだけでも、現役スカウトには心強いものがあるはずだ。そういう点をどう進めていけばいいかを学びたい。